

日本における生徒の国際社会への関心に関する一考察

A Study on the Students' Interest in International Society in Japan

張 瓊華 ZHANG, Qionghua

● 国際基督教大学教育研究所

Institute for Educational Research and Service, International Christian University

Keywords 国際理解, 国際協力, 関心
international understanding, international cooperation, interest

ABSTRACT

国際理解教育は欧米の文化や体制への一体化に機能する傾向があるのか、また地球的視点、グローバルな視点を欠いているのか。本稿は、それらを考えるために、生徒による国際社会への関心に焦点を当て、生徒がそれぞれの地域や国にどんな関心をもっているかについてアンケート調査のデータに基づいて分析し、次のようなことを明らかにした。ヨーロッパや欧米諸国に対する関心は強いが、それと同時にほかの多くの地域や国に対する関心も強くなる傾向が見られることから、国際理解教育は欧米の文化や体制への一体化に機能しているとは言えないが、ある程度寄与している可能性があるだろう。一部の国や地域に対する生徒の関心が見られないことから、地球的視点、グローバルな視点を欠く傾向があると言えよう。生徒が助けや援助が必要な国々に強い関心を示していることから、国際理解教育は、国際協力の面において積極的な役割を果たしていると思われる。

It has been said that international understanding education tends to identify more with European and American structure and culture. It has been said that it lacks a global viewpoint. Is this really true? This study focuses on the students' interest in international society, and tries to show whether the students have an interest in other regions and countries. The conclusions derived from this study are summarized as follows: The students take a high interest in Europe and America, but they also take interest in other regions and countries. Therefore international understanding education does not tend to identify only with European and American structure and culture, but it contributes to them in some ways. The students take little interest in some regions and countries. It implies that the education really doesn't have a global viewpoint. The

students take high interest in the countries which need help and assistance, so we realize that the education plays an important role in international cooperation.

1 問題関心

国際化、グローバル化の状況の中で、異なる国、異なる文化、異なる社会との共生が必要とされる。そのため、異文化理解・国際理解教育が唱えられ、学校教育に導入され展開されてきた。しかし異文化理解・国際理解教育は、友好的な国際関係のあり方や国家間の共生的関係を図るといった関心が強く、そのために、国際的なイデオロギー状況や権力関係に影響されると考えられる。また、国際理解教育に対して、欧米の文化や体制への一体化を暗黙の前提にしており、地球的視点、グローバルな視点を欠く傾向があるという批判もある。そこで本稿は、それらを考えるために、生徒による国際社会への関心に焦点を当て、生徒がそれぞれの地域や国にどんな関心をもっているか、そしてなぜなのかについて検討し、それを通して、日本における異文化理解・国際理解教育のあり方を考察したい。

異文化理解・国際理解をするには、まずそれに関心をもつことから始まらなければならないだろう。というのは、それに関心を寄せなければ、理解することも、さらに受け入れることもありえないからである。関心をもち、理解をし、その上受け入れることで、共生社会が実現されるのであろう。したがって、異文化理解・国際理解教育の機能やあり方を考える際、生徒の国際社会に対する関心がどのようなになっているかを問う必要がある。

これまでの異文化理解・国際理解教育に関する研究は政策の変遷に関する分析と学校教育の実態や実践を考察したものはほとんどである。生徒は国際社会に対していったいどのような関心を示しているかについては研究されてこなかった。そこで本稿では、日本の小・中・高校生を対象に行った国際理解・異文化理解に関する意識調査の結果に基づいて生徒の国際社会に対する関心に焦点を当てる。具体的には、生徒がそれぞれの地域や国に関心を

もっているのか、またはどんな国に関心を寄せているのか、それらと性別、学校教育とは関連があるのだろうか、さらには関心を寄せる理由は何かを分析する。

本稿で用いるデータは、2003年9月から10月にかけて、小・中・高校生を対象にした「生徒の国際理解や異文化理解に関する調査」¹の結果である。このアンケート調査は、埼玉県を中心に、神奈川県、愛知県、兵庫県の小学校4校（6年生）、中学校6校（1年生、2年生、3年生）、高等学校4校（1年生、2年生、3年生）の生徒を対象に行われ、有効回答数は1864であった。調査方法は、教室での集合・自記式である。

2 国際社会への生徒の関心

生徒の国際社会への関心は、さまざまな影響によって形成されていくが、ここでは、とりわけ重要だと思われる学校教育、性別との関連について検討する。なお、学校教育については、小学、中学、高校を区別する学校段階を用いる。

2.1 それぞれの地域に関心をもっているか

生徒に「あなたは以下の地域に関心をもっていますか」を聞くと、図1のように、「とても関心がある」の占める割合は、「ヨーロッパ」27.7%、「アジア」15.5%、「北アメリカ」12.7%で、ほかの地域が10%にも達していなく、全体的に低い。「とても関心がある」と「少し関心がある」を合わせると、関心度の高さはヨーロッパ、アジア、北アメリカの順になっている。これは、生徒がヨーロッパに関心があると同時に、程度の差があるものの、アジアにも関心をもっているということである。また、関心度の低い地域は中近東、オセアニア、南アメリカとなっている。

それではこのような関心度は、性別や学校段階

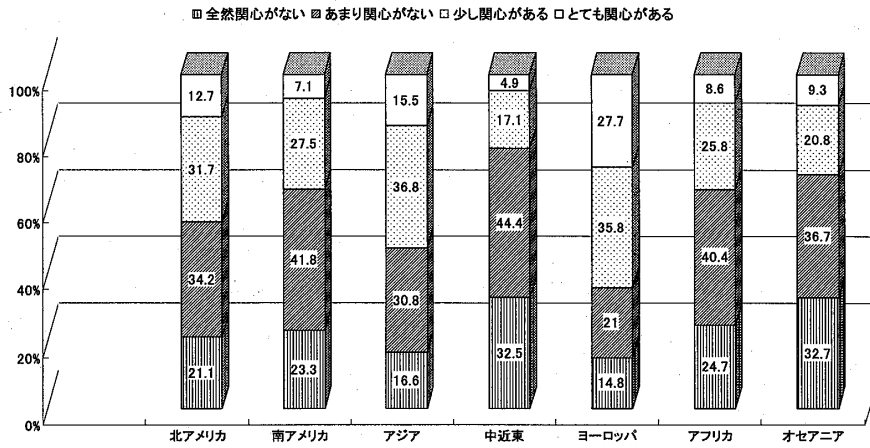


図1 地域への関心度

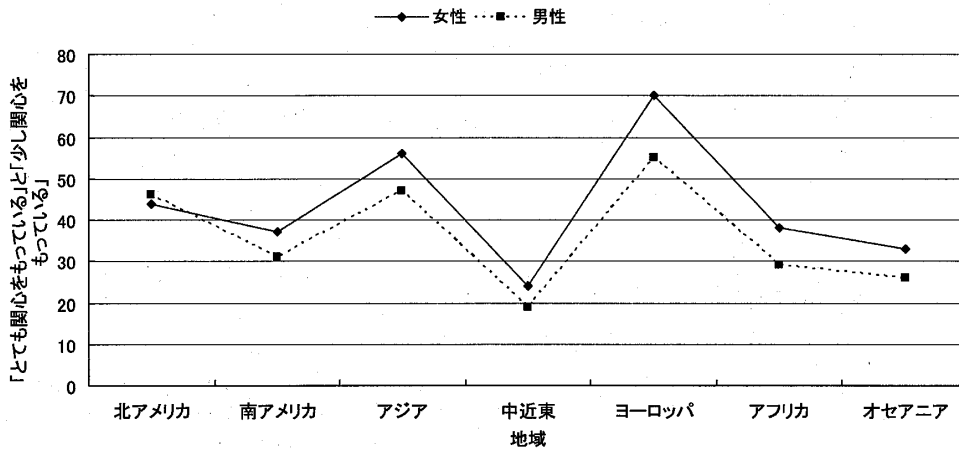


図2 性別とそれぞれの地域への関心度

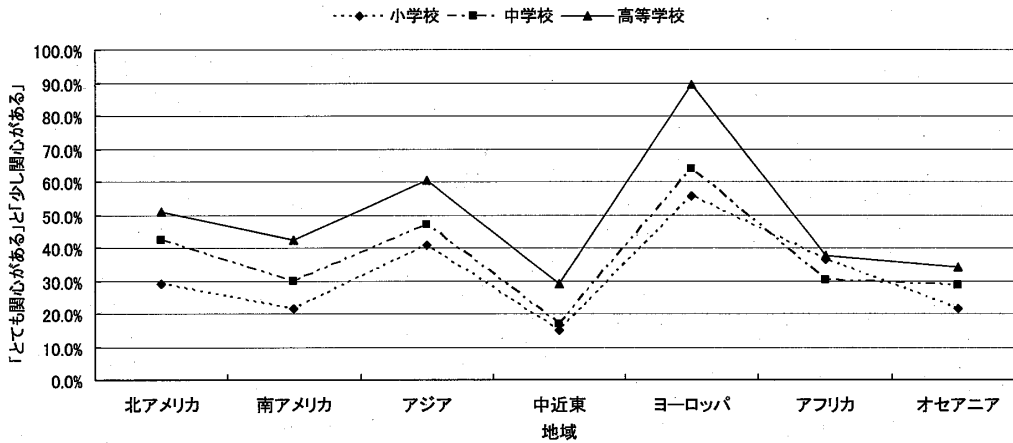


図3 学校段階とそれぞれの地域に関心をもっているか

とどのような関連があるかを見てみよう。

まず、性別との関連を見てみよう。図2は、性別とそれぞれの地域への関心度（「とても関心がある」と「少し関心がある」）を示したものである。それ

によると、北アメリカへの関心度は性別による差がない。また、南アメリカ、アジア、中近東、アフリカ、オセアニアに対する関心度は男子生徒より女子生徒のほうがやや高い。そして、ヨーロッパへの関

心度は全体的に高いだけでなく、女子生徒のほうの関心度はさらに高くなっている。

次に学校段階によってどのような違いがあるかを見てみよう。図3は学校段階とそれぞれの地域への関心度を示したものである。それによって明らかのように、中近東、オセアニア、アフリカなどの地域に対する関心度は学校段階による差が非常に小さく、特にアフリカに対する関心度は学校段階による差がほとんどない。ただし、北アメリカ、南アメリカ、アジアへの関心度は学校段階による差がかなり大きい。そしてヨーロッパに対する関心度は、小学と中学との差は小さく、高校との差はかなり大きい。つまり、全体的に見ると、小学生も中学生も高校生もヨーロッパに対する関心度が一番高い。しかも、その関心度は学校段階が上がるにつれて高くなっていく。では、ヨーロッパに対する関心の割合は

学校段階によってどのように異なっているかを見てみよう。

図4から分かるように、ヨーロッパに対する「とても関心がある」の占める割合は、小学の場合12.4%、中学の場合23.6%、そして高校の場合36.0%となっている。この場合の最高と最低との差は20ポイント以上もある。また、「とても関心がある」ないし「少し関心がある」の占める割合は、最高と最低との差は約30ポイントもある。このように、ヨーロッパに対する関心の割合も学校段階によってかなりの差が見られる。これは何故だろうか。やはり生徒はヨーロッパに志向するような教育を受けているのでしょうか。

2.2 それぞれの国に関心をもっているか

以下では、それぞれの国に関心をもっているかを

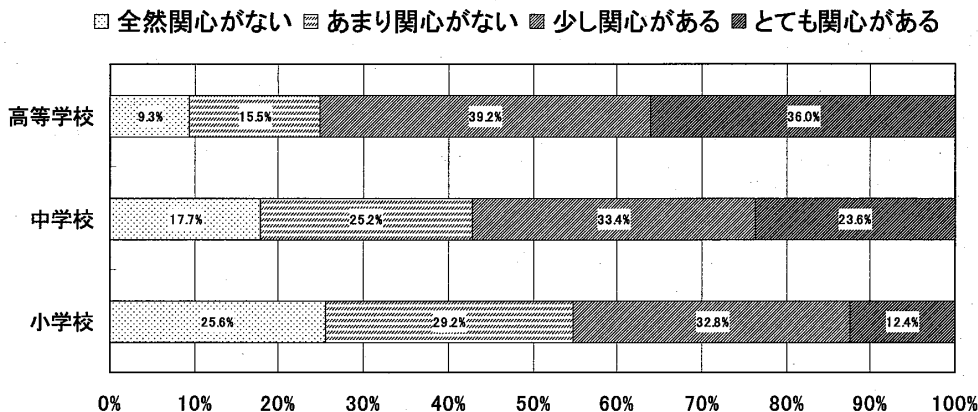


図4 ヨーロッパへの関心

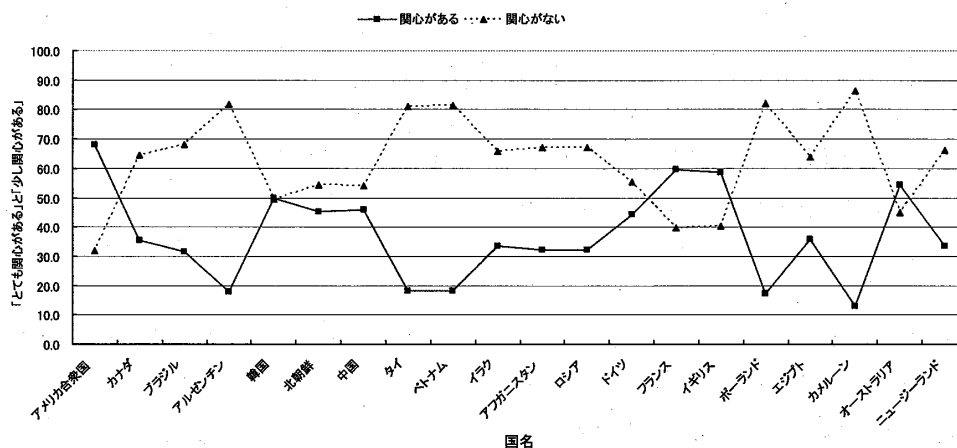


図5 それぞれの国に関心をもっていますか

見てみよう。

まず、全体的傾向を確認してみよう。

図5はそれぞれの国に対して関心があるか(「とても関心がある」と「少し関心がある」)、それとも関心がないか(「あまり関心がない」と「ぜんぜん関心がない」)を示したものである。図5から明らかのように、約7割の生徒がアメリカ合衆国に関心を示している。それから、フランス、イギリス、オーストラリアに対する生徒の関心度もかなり高い。またこれら四カ国に対しては、「関心がある」の占める割合は「関心がない」のそれより高くなっている。韓国、北朝鮮、中国に対する関心度はある程度高いが、「関心がない」をやや下回っている。そして、もっとも関心度の低い国はアルゼンチン、タイ、ベトナム、ポーランド、カメルーンなどである。このように、全体的に見ると、生徒が欧米に強

い関心を寄せていることが明らかとなる。

では、性別や学校段階別に見た場合はどうか。

図6は、性別とそれぞれの国への関心度(「とても関心がある」と「少し関心がある」)を示したものである。それを見ると、多くの国に対する関心度は男子生徒よりも女子生徒のほうがやや高い。ただし、ブラジル、アルゼンチン、カメルーンに対しては、男子生徒の関心度が女性学生より少し高くなっている。性別による差が相対的に大きいのはドイツ、イギリス、フランス、オーストラリアなどの国に対する関心度である。そして女子生徒がもっとも関心を寄せているのはドイツとアメリカ合衆国である。これは、性別による嗜好とそれぞれの国がもっている特徴に原因があると考えられる。

次に図7によって、それぞれの国に対する関心

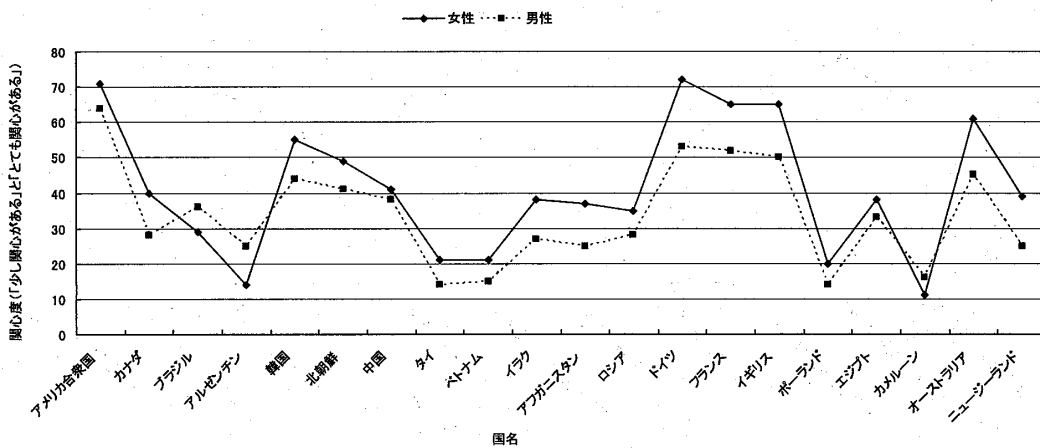


図6 性別とそれぞれの国への関心度

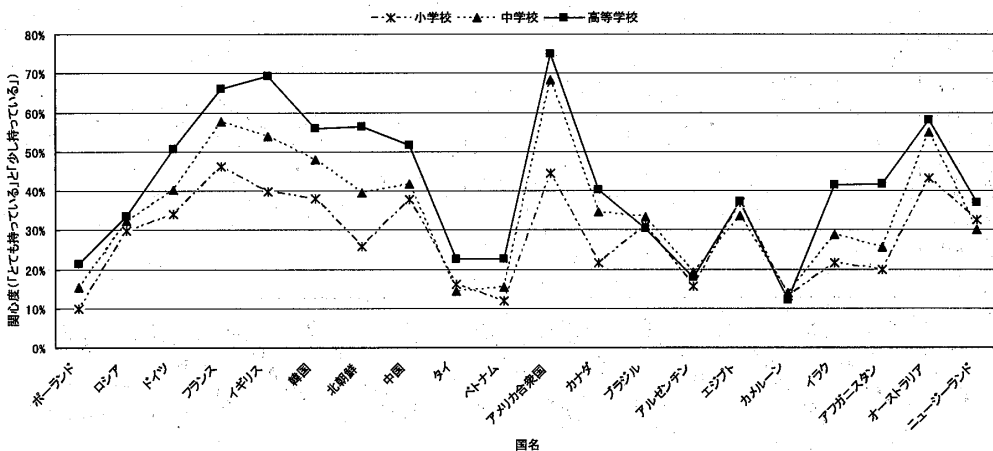


図7 学校段階とそれぞれの国への関心度

度と学校段階との関連を見てみよう。ロシア、ブラジル、アルゼンチン、エジプト、カメルーンへの関心度は学校段階との関連が見られない。ポーランド、ドイツ、韓国、中国、タイ、ベトナム、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに対する関心度は学校段階が上がるにつれて、やや高くなる傾向が見られる。そして、アメリカ、フランス、イギリス、北朝鮮、イラク、アフガニスタンに関する関心度は小学校から中学校へ、そして中学校から高等学校へ上がるにつれて、かなり高くなっていく傾向が見られる。これはなぜだろうか。国際理解教育が欧米諸国に志向させるような役割を果たしているならば、なぜ生徒は北朝鮮、イラク、アフガニスタンなどの国にも関心を寄せることになるのだろうか。

これらの結果を説明するために、生徒はどんな国に関心をもっているかをさらに検討する必要がある。

あろう。

図8によって生徒はいったいどんな国に関心をもっているかを見てみよう。生徒がもっとも関心があるのは「自然の素晴らしい国」、「珍しい動物がいる国」、「料理の美味しい国」である。次に、「優れた技術を持つ国」、「芸術の素晴らしい国」、「文化遺産が多い国」、「戦争で苦しんでいる国」、「日本の安全を脅かす国」、「助けや援助が必要な国」にもかなり高い関心を示している。そして、関心度が低いのは「日本の主な貿易相手国」と「資源が豊かな国」である。

またそれを性別との関連を見た場合（図9）、「すぐれた技術を持つ国」、「日本の主な貿易相手国」、「資源の豊かな国」に対する関心度は性別による差がほとんどない。また「文化遺産が多い国」、「めずらしい動物がいる国」、「日本の安全を脅かす

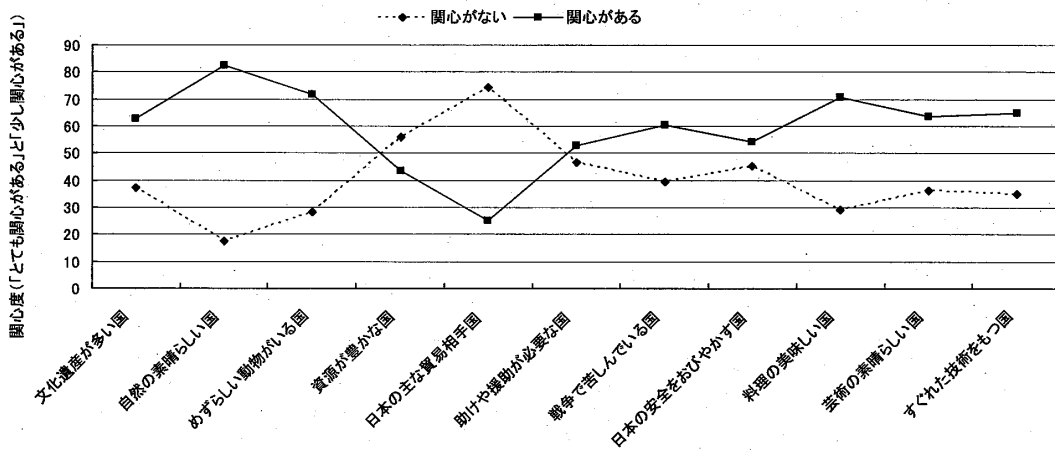


図8 どんな国に関心をもっていますか

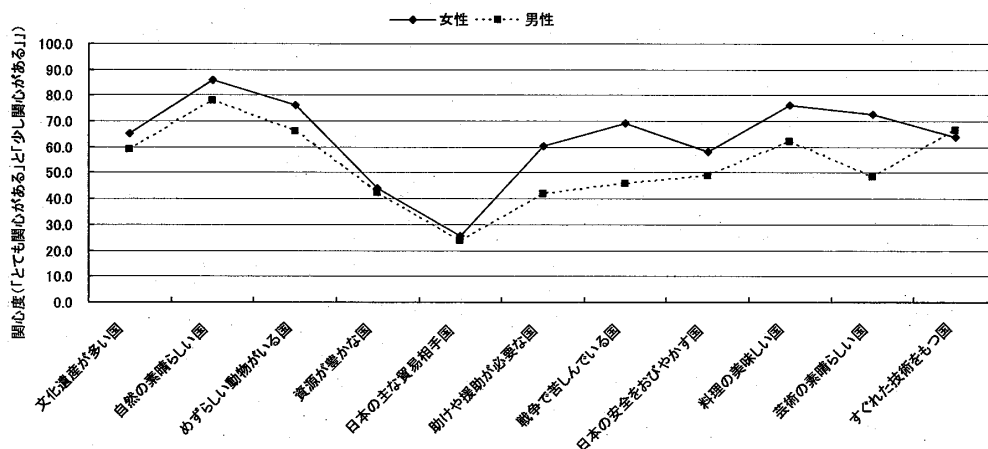


図9 性別とどんな国に関心をもっているか

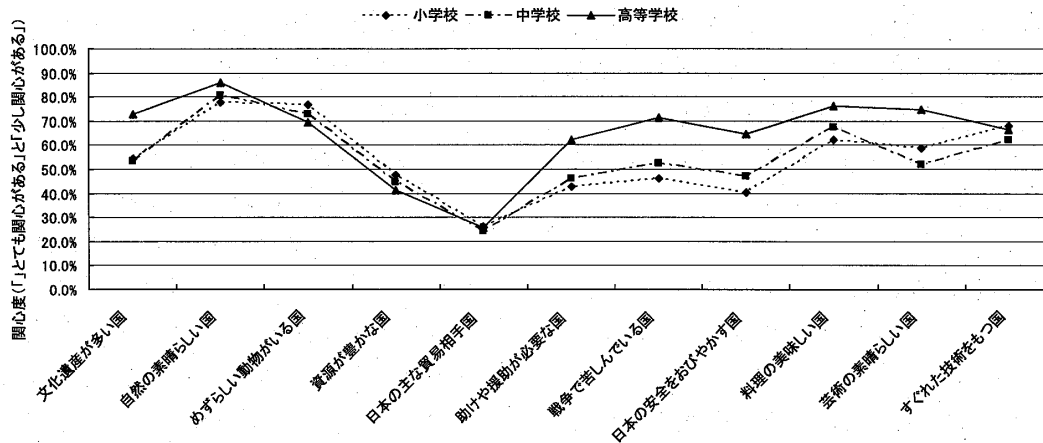


図10 学校段階とどんな国に関心をもっているか

国、「料理の美味しい国」に対する関心度は、男子生徒よりも女子生徒のほうがやや高い。そして「芸術の素晴らしい国」、「戦争で苦しんでいる国」、「助けや援助が必要な国」への関心度は性別による差がかなりあり、女子生徒のほうの関心度が高くなっている。

学校段階との関連では（図10）、学校段階が上がると、「文化遺産が多い国」、「助けや援助が必要な国」、「戦争で苦しんでいる国」、「日本の安全を脅かす国」、「芸術の素晴らしい国」に対する関心度が高くなっていく。それに対して「自然の素晴らしい国」、「めずらしい動物」、「料理の美味しい国」への関心度は、全体的に高いが、学校段階による差はあまり見られない。生徒の関心度が低いのは、「日本の主な貿易相手国」、「資源が豊かな国」であり、しかも学校段階による差はほとんど見られない。

以上では、それぞれの地域や国およびどんな国に関心があるかについて全体的傾向や、性別・学校段階による違いがあるかどうかを検討してきた。しかしそれだけでは、生徒がなぜそれらの地域あるいは国に関心をもつのかは説明することができない。それを解釈するために、生徒のそれぞれの地域や国に関心がある理由を検討する必要がある。

2.3 生徒による理由づけ

調査票では、最後に「あなたがとくに関心を寄せている国または地域はどこですか。国名または地域名を挙げてください。またその理由も簡単にお書

きください」という項目がある。ここでは、生徒が記入したものを整理し検討してみよう。

a. ヨーロッパに関心を寄せる理由づけ

地域別に見た場合、ヨーロッパに対する関心度をもっとも高いが、その理由は以下の通りである。

小学生の場合は、次のように、その自然、料理、芸術、資源などに興味をもっているからという。

- ・料理がおいしく自然がすばらしいから。
- ・気品があって、芸術の都があるから。パリにはとても関心がある。
- ・自給自足（穀物を）ができてから。
- ・ヨーロッパの中でもイギリスなどでは石油が見つかったなどと聞いたので行ってみたいから。

中学生の場合は、町並み、雰囲気、観光名所、料理、サッカー、美術品などヨーロッパのさまざまな文化やスポーツに惹かれているからだという。

- ・きれいな町だから。
- ・行きたい。
- ・雰囲気がよさそう。いろんな観光地がありそう。
- ・名所やおいしい料理が多いから。
- ・好きだから。
- ・けっこうステキそう…。
- ・大リーグやサッカーなどが進んでいるから？
- ・美術品がたくさんあるから。
- ・いろんな文化があるから。

そして高校生の場合も次のように、スポーツや文化を挙げているが、挙げられた文化の範囲がさらに広がっており、雰囲気、料理、町並み、美術品のほかに、歴史ある建築物、音楽、芸術、文化遺産なども憧れの理由としている。

- ・サッカーが盛んだから。
- ・とても優雅な雰囲気があるから。
- ・いろいろな服、バッグなどがそろっているから。
- ・文化がおもしろい。
- ・芸術や音楽に興味があるから。町がきれいだから。
- ・明るく、楽しいイメージがあるから。
- ・町並がキレイだから見てみたい。
- ・夢がパティシエになることなので、フランス菓子を中心としたヨーロッパの菓子にとっても興味があるので、実際に行って勉強したいと思っているから。
- ・あこがれているから。
- ・好きなマンガの舞台がそこに多いから。
- ・芸術が盛んだから、勉強したい。
- ・とてもオシャレな感じがするから、一度行ってみたい。
- ・美術館を見てまわりたいです。
- ・芸術的な建築物や絵画、料理を見てまわりたいから。
- ・ヨーロッパの文化が好きだから。
- ・すばらしい芸術をたくさん見たいし、美味しいものをたくさん食べたいから。
- ・歴史ある建物がたくさんあるから。
- ・文化遺産、建築等を見てみたいから。
- ・進んでいるから。
- ・なんかかっこいいから。

このように、ヨーロッパに関心を寄せているのは、その文化やスポーツに惹かれているからである。学校段階が上がるにつれて、その関心度が高くなるのは学校での勉強を通してヨーロッパに関するさまざまな知識を身につけたからだと考えられる。

b. アメリカ合衆国に関心を寄せる理由づけ

それぞれの国に対する関心度を見た場合、アメ

リカ合衆国に非常に強い関心を寄せていることがすでにデータ分析で明らかとなったが、その理由づけを見てみよう。

アメリカ合衆国を挙げる理由として以下の通りになっている。小学生は自由の女神、スポーツ、ハワイ、世界の先端、日本との良い関係を理由としている。

- ・自由の女神が見てみたい。
- ・バスケットがうまいアメリカの友達がほしいから。
- ・ハワイがあり、泳げる。
- ・日本にまだ売ってないフィギュアがあるから。
- ・野球が有名だから。
- ・つねに、世界の先端に立つアメリカに関心があるからです。
- ・海が透き通ってきれいで魚もいっぱいいるから。
- ・アメリカは、日本との関係がいいので、とても仲がいい。なので、アメリカをとっても尊敬している。

中学生は以下のように、自由の国、チャンスの国、行ったことがある、経済力、スポーツ、世界での高い地位などの理由を挙げている。

- ・自由だから。
- ・競争力が激しく、また冒険家が多い。アメリカはチャンスの国。競争が激しいから英雄もたくさん出ている。オレは英雄になる。
- ・旅行で行ったことがあるから。
- ・1番日本と似ている国だと思うから。
- ・いろいろな文化が発達しているから。
- ・去年ホームステイに行って楽しかったから。
- ・カッコイイから。
- ・戦争などがあったので、それに関心をもっている。
- ・文化や経済がとても発達しているから。
- ・スポーツ（野球）が盛んだから。
- ・バスケット（NBA）があるから。
- ・松井選手がいるから。
- ・みずから核兵器をつくり、自分たちで処理する運動をしているのが偉いとおもう。
- ・ヤンキーススタジアムがあるから。
- ・貿易センタービルの後地を見てみたい。
- ・すごい技術とかあるから。

- ・赤毛のアンの家をテレビで見て、きれいと思ったから。
- ・大きいし、にぎやか。
- ・世界でけっこう優れている地位にいるから!!

そして高校生は、日本との交流や関係、スポーツ、自由の国、能力社会、選挙制度、軍事力の強さ、先進性、土地の広さ、技術力や経済力などを評価している一方、もう一方では、治安の悪さ、勝手に戦争を起こすことに対して批判的である。つまり、アメリカ合衆国に強い関心を寄せているからと言って、アメリカ合衆国志向することとは言い切れないということである。

- ・日本との交流がさかんだから。
- ・テロ事件で、ビルがどんなふうになったかなど興味があるから。
- ・スポーツがとても盛んなので、生で見たいから。
- ・自由の国だから
- ・中心的な国だし、行ったら色々な発見があり楽しそう!!
- ・土地も広いし、文化も発展しているから。
- ・なんとなく。
- ・今、すごい英語に関心があるから。
- ・電子機器の最先端に興味があるから。
- ・大統領選挙があるから。
- ・世界で1番の国だから。
- ・殺人や強盗が多い国だから。
- ・アメリカの決断1つで世界が戦争になるかならないか決まるから。アメリカはエゴイストだから。
- ・大統領が頭わるいから、気になる。
- ・正義のように言っているけど、戦争をそんな考えでやっていいのかな…。
- ・スポーツ先進国で経済でも世界一だから
- ・今、世界で一番軍事力が強いと評判だから。
- ・アメリカの行動で、世界情勢が変わるから。
- ・限りなく長い道路をバイクで走ってみたい。
- ・色々問題があるから。
- ・ハリウッドがある、世界のリーダーである。
- ・人とのコミュニケーションがとりやすい。
- ・あこがれているから。

- ・何か魅力的に見えるから。
- ・すぐれた技術を持つ、自由、能力社会。

c. オーストラリアに関心を寄せる理由づけ

では、オーストラリアを挙げる理由は何かを次に見てみよう。

オーストラリアに関心をもつ理由として以下のよう

小学生の場合

- ・海や自然がキレイそうだからですよ…
- ・楽しそうだしおもしろそう。
- ・野生のカンガルーやいろいろな動物をみてみたいから。
- ・コアラを抱っこしてみたい。
- ・動物が好きだから。

中学生の場合

- ・コアラとふれあいをしたい、いろんなオーストラリア動物植物を見てみたいから。
- ・とてもいい国だと思うから!
- ・イアン・ソープを見てみたいから。自然が多いから。
- ・1回、ホームステイに行つてすごく印象が良かったから、いろんな事が知りたい。
- ・いろいろな動物がいるから。
- ・きれいそうな所だから。
- ・野生の動物を見てみたいから (日本にはいない)。
- ・自然が豊富で動物達が自由に暮らしているから。
- ・自分は動物や海・森・川などがあるところが好きだから。

高校生の場合

- ・自然がとても豊なので。
- ・コアラがいるから。
- ・日本のように安全だから。
- ・海がキレイだから
- ・自然が豊かであるから。
- ・めずらしい動物がたくさんいるから。

- ・近いし、自然が多そう。コアラ&カンガルーがいる。楽しそうだから。
- ・音楽の文化などを勉強したいから。
- ・可愛い動物がいるし、あきなさそうだから。
- ・2週間ホームステイに行ったことがあるから。
- ・自然が多い。海が近い。動物がたくさん。

このように、小学生も中学生、そして高校生もオーストラリアの自然の美しさや珍しい動物がいることで関心をもっていることが分かる。またすでに分析したように、学校段階にかかわらず生徒は「自然の素晴らしい国」、「珍しい動物がいる国」に強い関心を示している。そのため、学校段階にかかわらず、多くの生徒がオーストラリアに関心を寄せているだと考えられる。

d. 北朝鮮に関心を寄せる理由づけ

北朝鮮を挙げる理由として、以下のようになっている。

小学生は以下のように、拉致事件や核兵器の問題に関心を寄せている。そしてそれはメディアの報道に影響されていることも分かる。

- ・らち事件。
- ・いったい、何を考えているのか？
- ・核兵器。
- ・本当にわるい国なのか。
- ・今、ニュースなどで、問題になっているから。
- ・北朝鮮は、日本のことをどのように思っているか、気になるから。

中学生は核兵器等への不安に関心を寄せるほか、その国の国民に同情し、国の実態がどうなっているかを知りたいから関心があるという。

- ・核やいろんな実態を知りたい。
- ・よくテレビで問題になっているから!!
- ・核問題などが気になるため。
- ・さまざまな問題のある国だから。
- ・ニュースで北朝鮮のことをやっていて、実際はどんな国なのか知りたい。
- ・今、世界で問題になっている国だから。
- ・いろいろな問題が報じられているから。

- ・昔、日本と何かでかかわっていたから。
- ・国民の人がかわいそうな気がするから。
- ・戦争を起こそうとしていてなんか不安だから。

高校生の場合は、以下のように、拉致事件、日本との政治のやり方の違いや考え方の違い、そしてその人々を助けてあげたいという気持ちから関心を寄せている。

- ・特殊な国だし、今、一番日本との関係が重要な国だから。
- ・考え方がまわりの国と違うから。
- ・政治のやり方。
- ・本当に謎な国だから。
- ・日本人を拉致したりするなど、日本との問題が数多くあるから。
- ・本当の姿を見たことがないから。
- ・ニュースで色々やっているから。
- ・国の状態が気になる。
- ・狂っているから。
- ・様々な問題が早く解決してほしいから。
- ・日本・世界と色々もめているから。拉致事件など。
- ・少し考えがおかしいと思うし、北朝鮮の人々を助けてあげたいと思うから。
- ・newsではいろいろ言われているけど…実際はどうなのか知りたい!
- ・日本から近く、関係のある国だから。日本に大きな影響をあたえると思うので。
- ・早く平和になってほしい。
- ・これからどう変わっていくのか気になる。
- ・最近何かと耳にするし、日本では考えられない!!ということが多から。

このように、小学生は核兵器、拉致事件などニュースになっている問題に関心があるが、中学生はその国の実態を知りたいということで、そして高校生は政治制度を含めて広い範囲での問題や何かをしてあげたいという気持ちで関心を寄せていることが分かる。もちろん、その中には、北朝鮮に嫌悪な感情をもつ生徒もいる。すでにどんな国に関心をもっているかに関する分析で明らかになったように、学校段階が上がると、生徒の「助けや援助が

必要な国」, 「戦争で苦しんでいる国」および「日本の安全を脅かす国」に対する関心度は高くなっている。この結果からも生徒はなぜ北朝鮮に関心を寄せているか, そしてその関心度は学校段階が上がるにつれて高くなっているかが分かるだろう。

e. アフガニスタンやイラクに関心を寄せる理由づけ
アフガニスタンやイラクを挙げる理由は以下の通りである。

小学生の場合

- ・ケガをしている人を助けたい。
- ・戦争後の国の様子が気になるから。
- ・戦争などをやっても懸命に生きているから。

中学生の場合

- ・今でも多くの難民がいるから。
- ・戦争をしていて, イマはどうしているかすごく知りたい。
- ・地雷が埋められていて, そこで生活をしている人たちの事が知りたいから。
- ・紛争や貧困問題を抱えているから。
- ・貧困な国なので協力してあげたいし, いろんな人と友達になりたい。
- ・今, アメリカと戦争をしているので, 心配だから。
- ・戦争などで苦しんでいる人を助けたい。
- ・戦争に巻き込まれている子供たちがたくさんいるから。

高校生の場合

- ・戦争からその後の状況が気になる。
- ・飢えで苦しんで死んでしまう人などが多すぎる。日本は裕福だとすごく感じる。
- ・テレビで, 両親などが戦争で亡くなり, どうすることもできない子供たちを見たから。
- ・戦争が起こり, 難民が増えているから。わたしはガールスカウトに入っているから…。
- ・戦争があったし, その後はどうなったかなどが気になるから。
- ・イラクがかわいそうだから。
- ・今も地雷など, 昔の傷跡が残っていて, とてもかわいそう。だから, 知りたい。

- ・戦争の跡が未だに残っている国で, TVなどで興味を持った。そこで援助活動などをしてみたい。
- ・戦争後の今の状況をこの目で見てみたいから。

以上の理由から分かるように, アフガニスタンやイラクに関心があるのは, 小学生も, 中学生も, そして高校生もその人々が戦争で苦しんでいるだと思っているからである。とくに中学生と高校生はアフガニスタンやイラクに助けや援助をしてあげたい気持ちで関心をもっている。これも「助けや援助が必要な国」や「戦争で苦しんでいる国」に学校段階によって関心度が高くなることによる結果だと考えられる。

3 考察

国際理解や異文化理解が必要とされる時代において, それらの教育が提唱され, また学校教育に導入され, そして実践されている。その教育のあり方や機能を考えるため, 本稿では生徒がどの地域, どの国ひいてはどんな国に関心をもっているか, またなぜそれに関心をもっているか, そしてそれらと性別や学校教育との結びつきがあるのかを分析した。

地域別に見た場合, ヨーロッパにもっとも強い関心を寄せていることが明らかとなった。またアジア, 北アメリカに対する関心度も高い。しかし, 中近東, オセアニア, 南アメリカに対する関心度はかなり低いのである。性別との関連では, 男子生徒よりも女子生徒のほうがヨーロッパ, アジア, 南アメリカ, 北アメリカ, 中近東, アフリカ, オセアニアにより強い関心を示している。学校段階との関連では, 学校段階が上がるにつれて, オセアニア以外の地域に対する関心度は高くなるが, その関心度の高さはヨーロッパ, アジア, 北アメリカ, 南アメリカの順になっている。ただし, 中近東, オセアニア, アフリカなどの地域に対する関心度は学校段階による差が非常に小さく, 特にアフリカに対する関心度は学校段階による差がほとんどない。確かにヨーロッパへの関心度は高いが, 学校段が上がるにつれて, アジアやほかの地域への関心度も程度の差があるものの, 高くなっていく傾向が見られること

から、生徒をヨーロッパのみに関心をもたせるような教育が行われていないと言えよう。しかし、もともと関心度の低い地域である中近東、オセアニア、アフリカなどに対する関心度があまり上がらないことから、国際理解教育は地球的視点、グローバルな視点を欠く傾向があると言えよう。

国別に見た場合、全体的傾向として、アメリカ合衆国に対する関心度がもっとも高く、約7割の生徒がアメリカ合衆国に関心を寄せている。それから、フランス、イギリス、オーストラリアに対する関心度もかなり高い。また韓国、北朝鮮、中国に対してもある程度関心をもっている。ただし、アルゼンチン、タイ、ベトナム、ポーランド、カメルーンなどの国にはあまり関心を示していない。性別との関連では、多くの国に対する関心度は、男子生徒よりも女子生徒のほうがやや高い。学校段階との関連では、アメリカ、フランス、イギリスにのみならず、北朝鮮、イラク、アフガニスタンに関する関心度も学校段階が上がるにつれてかなり高くなっている。またポーランド、ドイツ、韓国、中国、タイ、ベトナム、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに対する関心度も学校段階が上がるとやや高くなる。ただし、ロシア、ブラジル、アルゼンチン、エジプト、カメルーンへの関心度は学校段階との関連が見られない。つまり、ここでも欧米諸国に対する関心度は高いが、ほかの一部の国々に対する関心度も学校段階が上がるにつれて、かなり高くなっている。したがって、欧米諸国にのみ関心をもたせるような教育が考えられないが、生徒が一部の国に関心をあまり示されていないのは、やはり異文化理解・国際理解教育が地球的視点、グローバルな視点を欠く傾向があることと思われる。

どんな国に関心があるかについて見た場合、生徒がもっとも関心を示しているのは「自然の素晴らしい国」、「珍しい動物がいる国」、「料理の美味しい国」である。それから、「優れた技術を持つ国」、「文化遺産が多い国」、「芸術の素晴らしい国」、「日本の安全を脅かす国」、「戦争で苦しんでいる国」、「助けや援助が必要な国」にもかなり強い関心を寄せている。性別との関連では、「芸術の素晴らしい国」、「戦争で苦しんでいる国」、「助けや援助が必

要な国」などへの関心度は性別によってかなりの差が見られ、男子生徒よりも女子生徒のほうが関心度がやや高い。学校段階との関連では、学校段階が上がると、「文化遺産が多い国」、「助けや援助が必要な国」、「戦争で苦しんでいる国」、「日本の安全を脅かす国」、「芸術の素晴らしい国」に対する関心度が高くなる。それに対して「自然の素晴らしい国」、「めずらしい動物」、「料理の美味しい国」への関心度は、全体的に高いが、学校段階による差はあまり見られない。したがって、国際協力、国際援助の視点から見ると、国際理解教育が積極的な役割を果たしていると言えよう。

それぞれの地域や国に関心を寄せる理由を見た場合、もっとも高い関心を寄せているヨーロッパについては、文化（芸術、建築物、料理など）やスポーツに惹かれているからだという。この場合、高校生が言及している文化の範囲は小中学生より広い。またもっとも強い関心を示しているアメリカ合衆国については、小中学生は自由の女神、スポーツ、ハワイ、世界の先端、経済力、世界での高い地位、日本との良い関係などを理由としているが、高校生はスポーツ、選挙制度、軍事力の強さ、先進性、土地の広さ、技術力や経済力を評価しているが、もう一方では、治安の悪さ、勝手に戦争を起こすことに対して批判的である。オーストラリアについては、小学生も中学生も、そして高校生もその自然の美しさや珍しい動物がいることで関心をもっているという。北朝鮮については、核兵器、拉致事件など報道されている問題で関心を引き起こされ、さらにその国の実態を知りたいということや助けてあげたい気持ちもある一方、もう一方で嫌悪な感情をもっている。アフガニスタンやイラクについては、小学生も、中学生も、そして高校生もその人々が戦争で苦しんでいるだと思い、助けや援助をしてあげたい気持ちで関心を寄せている。これは、国際協力の面で、国際理解教育が積極的な役割を果たしていると考えられる。

以上のように、ヨーロッパや欧米諸国に対する関心度の高さとその関心をもつ理由から、異文化理解・国際理解教育が欧米文化に関心をもたせ、そして志向させることにある程度寄与している可能性

もあろう。しかし欧米に関心をもたせると同時に、ほかの多くの地域や国に対しても関心をもたせていることと、アメリカ合衆国に対する関心には、批判的、否定的な見方もあることから、一概に欧米の文化や体制への一体化傾向があるとは言いきれないのであろう。また、学校段階が上がると、「助けや援助が必要な国」、「戦争で苦しんでいる国」に対する関心度が高くなることは、アフガニスタンやイラクのような国際援助が必要とされる国々に関心を起こさせることにつながっていると考えられる。つまり、国際理解教育は生徒の国際援助や国際協力に対する意識形成にポジティブな役割を果たしていると言えよう。しかし、一部の国や地域に関心が見られないことから、地球的視点、グローバルな視点を欠く傾向があると言えよう。さらに今後の教育課題として、男子生徒の国際社会への関心をもっともたせることに力を入れる必要がある。

注

- 1 本調査は、国際基督教大学の文部科学省21世紀COEプログラム『「平和・安全・共生」研究教育の形成と展開』の教育グループ（グループ代表：藤田英典教授）の研究の一環として、藤田英典・張瓊華により行われたものである。共同研究者の藤田英典先生に感謝します。

主な参考文献

- 佐藤郡衛・林英和編（1998）国際理解教育の授業づくり
教育出版
- 図書教材研究センター（1994）国際理解教育・環境教育
などの現状と課題 図書教材研究センター 図書教材
研究シリーズ 14
- 石井由理（2003）総合的な学習と国際理解教育 国際基
督教大学学報 教育研究45
- 張瓊華（2004）学校における国際理解教育の実態に関
する考察—埼玉県事例から— 国際基督教大学
教育研究46
- 張瓊華（2006）国際協力・異文化理解教育の実践に関す
る考察—埼玉県A高等学校を中心に— 国際基督
教大学 教育研究48